

F. R. リーヴィスと英文学部の理想

石原 浩澄

はじめに

英国の文芸批評家 F. R. リーヴィス (1895-1978) は、1930 年前後から晩年の 70 年代にかけて英国の批評界・教育界に多大な影響を及ぼした人物であるが、今日の文学研究において議論の正面に据えられることは稀である¹⁾。文学理論の解説書などで紹介されることがあるとしても、「リベラル・ヒューマニズム」あるいは「リベラル・モラリズム」などのセクションの中で、せいぜい冒頭近くで軽く触れられる程度だろう。たとえばバリー (Peter Barry) の記述によれば、リーヴィスは文学「批評理論の展開以前の最も影響力を持った英国の批評家」(28) という位置づけだ。もとより、リーヴィス自身が理論を嫌悪したという側面をもっていることもよく知られているのだが、いずれにしても、その後諸理論が次々と栄枯盛衰していく文学批評理論史においてリーヴィスは、「理論以前の」批評家として理解され、あらためて議論すべき必要性はないという雰囲気濃厚で、したがって彼の言論活動そのものの検証はまれである。もはや敢えて正面から向き合うには値しない批評家と考えられているといっても極論ではないだろう。

このように現状をとらえながら本稿が敢えてリーヴィスに向き合おうとするのは、何も彼を批評理論の最前線へと復権させようというような大胆な意図からではない。敢えて言うならば、それは前述の解説書などが示しているような、ともすれば見過ごされてしまいそうなリーヴィスの位置、つまり、現代の文学研究・批評における黎明期に位置する人物という点に可能性を探りたいと思うからである。周知のように、リーヴィ

スは T. S. エリオットなどの伝統の概念を受け継ぎ、「偉大な伝統」を主張し、英文学キャノンの大胆な見直しを提唱した。結果として、今日の視点からは前-理論的とはいえ、その後の文学研究・批評の方向性に一定の影響を与えることとなった。現在の文学研究の黎明期に目を向けること、つまり専門化と同時に一大産業化してきた文学研究・批評活動のひとつの始原に目を向けることは、ひとつの文化言説や学問領域およびその対象となる文学者像が、社会的・文化的に構築されていく環境や過程へと注目していくこと、ひいては、言語文化活動としての文学研究・批評の社会文化的構築過程にスポットライトをあてる作業の一隅を占めることになることと期するからである。

このように、若干大ききな絵を一方で想定しつつ、本稿が射程とするのは、大学人としてのリーヴィスの側面である。時に過激で挑発的な発言により、厳しい批判や反論を誘発することもあったリーヴィスは、英文学批評にとどまらず文化論や教育論も著している。自らもケンブリッジ大学を拠点として言論活動を展開したリーヴィスは、大学教育のあり方自体に関して発言することも多かった。当然ながら彼の教育論や大学論は文学批評と無関係ではなかったのだが、リーヴィスが教育・研究活動を開始する 1930 年前後という時期は、直前に、英国における英文学教育に関する活発な議論の展開、ならびに、オックスフォード・ケンブリッジというイングランドの古典大学 (ancient universities) において英文学教育の本格的な導入を見た時代でもあった。大学人批評家としてのリーヴィスも、おのずと自らの理想とする英文学部 (English School) にも言及することとなる。

ケンブリッジ内での処遇は恵まれていたとは決して言い難いものであったにもかかわらず、今日読み直してみてもリーヴィスは極めて熱心な大学人・教育者であり、大学の役割、そして自らの専門とする英文学の役割に確信を抱きながら自説を発信した人物である。1943 年出版の、

その名も『教育と大学』(*Education and the University*, 以下 *EU* と略記) という著書の中でリーヴィスは、大学は「文化伝統のシンボル」(16) であると述べ、その役割を「人間的意識の生きた中心」となることであるととらえ²⁾、大学における教養教育 (*liberal education*) の重要性を訴えた。そして「いかに『教養人 (*educated man*)』——すなわち、知性を備え、現代文明の諸課題に責任を負えるような、人文学的素養 (*humane culture*) を有する人物——を生み出すか」(30) が喫緊の課題であると言明し、「文化的伝統を継承する試み」(17) の必要性を訴えるリーヴィスは、大学における教養教育の中心に英文学を据えようと主張したのである。

今日のわれわれにはやや大胆ともいえるこうした英文学部構想を取り巻く背景を概観しつつ、以下の論考においては、リーヴィスの考える英文学部の特徴、ならびに、それと英文学批評を中心とするリーヴィスの言論活動との関連を明らかにする議論をしていきたい。そしてその中で、リーヴィスが用いた主要概念の中でも、現実性を伴わない「神話」として、ともすれば揶揄され、時には批判の対象ともなってきた「有機的共同体」という概念についての若干の修正見解を提示してみたいと思う。

1. 背景：英国における英文学教育の制度化への動きとケンブリッジ

リーヴィスの英文学部構想を考察するにあたって、ひとつの背景として英国の大学における英文学教育の制度化について本節では概観してみたい。その前に比較対照の意味において、若干わが国の状況に目を向けてみよう。明治を迎えた近代日本の高等教育においては、外国人教師による英語による講義を中心とした「英学本位体制」がとられていたとはいえ、英文学研究が体系的に組み入れられていたわけではなかった。開成所→開成学校→東京開成学校を経て発展してきた東京大学は、1886

(明治 19) 年 3 月の帝国大学令により帝国大学として改編される。帝大の文科大学は、哲学、和文学、漢文学、博言学の 4 学科でスタートした。翌 1887 年には史学科、英文学科、独逸文学科が増設され、89 年にはさらに国史科、仏蘭西文学科が加わるが、わが国高等教育政策の中に英文学教育が制度として組み入れられるのはこの時期であると言えるだろう³⁾。近代化の遅れた日本の状況に鑑みれば、本国英国での制度化はさぞかし年月を遡るのではないかと思いたくるところだが、意外とそうではない。

英国における英文学研究・教育の成立史・発展史に関する研究はこれまでもすぐれたものが複数公表されている⁴⁾。たとえば、パーマー (D. J. Palmer) は、19 世紀中盤から英文学教育が成人教育の場や技術者学校 (Mechanics Institute) などを中心に展開されていった様子を記述している。産業革命の進展に伴い大衆の識字率も上昇してくると、聖書の読みを中心とする教育への需要が高まり、それらがさらに自由化・世俗化してくると、聖書に代わってパンヤンやミルトンなども読まれるようになる (29-31 参照)。実践的な教育機関として創設された Mechanics Institute においても、技術知識以外の教育への要求も高まってきて、英文学の講義もほとんどのプログラムに含まれていたという (31-32 参照)。こうして英文学教育が展開されていった背景には、パーマーによれば、「産業革命の精神的・物理的環境は多くの階級の人々の文化的生活を貧困にし、人々は伝統的過去から切り離され、またそれ故に国民としての文化的遺産との関係を構築する新たな手段を与えられることを必要としていた」(39) という人々の感情が存在したのだという。

初期の英文学教育の発展過程には、大学よりも先述の Mechanics Institute や大学のエクステンション運動などによる労働者階級教育や成人教育が大きく貢献していると指摘する論者は多い⁵⁾。そしてこうした教育の背景にあるのは、国民意識の高揚や階級間統合といった国家戦略的

な意図であったことも指摘される。ウィドーソン (Peter Widdowson) は、「これは明白に労働者階級において国家への帰属意識や『より大きな共感』意識を醸成し、他の階級との『仲間意識』を創造していくためであった」(42) と述べ、「[文学] は、ますます階級階層化する社会において、潜在的に分裂の危機をはらむ社会構成員に『自由な』あるいは『人間的』教育を提供することにより、彼らを『人間らしくし』かつ『文明化する』イデオロギーに駆られた主導者として存在したのである」(42-43) とまとめている⁶⁾。

大学レベルでの英文学教育に目を向ければ、ロンドンでは19世紀中盤には始まっていたようである。宗教からの独立を謳い世俗的教育 (secular education) を標榜したユニヴァーシティ・コリッジの設立は1826年、これに対抗するように国教会に基盤を置いたキングズ・コリッジは1831年に創設されている。学位授与の役割を担う統括的ロンドン大学 (University of London) の設立は1836年であるが (Palmer 16 参照)、両コリッジともに、ほぼ開学当初から英文学教授職が設けられていた (17-27 参照)。

オックスフォード、ケンブリッジの古典2大学では、人文教育の要としてギリシア・ラテンの古典語教育ならびに研究が深く根を下ろしていたということは想像に難くないが、古典教育の牙城にも英文学の波は押し寄せていた。古典教育偏重主義への批判の声は、オックスフォードでは19世紀前半から聞こえるようになっていたが、世紀の半ばには、東インド会社等の公務員採用の試験にも英語英文学 (English) が課されるようになり外部環境も変化すると、大学教育への影響や圧力も次第に強まってくるようになる。

1850年王立委員会 (Royal Commissions) の結果、オックスフォードでは非国教徒学生の入学を許可するなどの改革が推進される一方、新たな学部も増設される。1853年には自然科学部 (School of Natural Sciences)、法・近代史学部 (School of Law and Modern History) が、そ

して1870年には神学部 (School of Theology) が設置された。この神学部における卒業要件4部門のひとつを占めていたのが英文学であった (Palmer 68-70 参照)。もとより、英文学とは別にアングロ=サクソンの研究および講座はオックスフォードでは古くから存在していた。

英文学部の設置の時期がオックスフォードにも迫ることになるが、パーマーによれば、その背後あったのは、上でも少し触れたような一般的な英文学教育への要請、すなわち、新しい産業社会において存亡の危機が叫ばれる文化伝統を提供する人文教育への期待というよりも、あくまで知識の向上や専門的学問の追究といった大学としての機能に見合った学問であるか否かという基準であったようである (78-79 参照)。したがって、従来からのアカデミックな学問に対する根強い考えが残るところでは、1894年に英文学のコースが設立された時でも、「まだそこから[英文学コースが]自由になれていなかったようなアングロ=サクソン、ゴシック、レット=スラブ語、中期英語など、従来からの歴史的言語研究の極めて大きな要素が残っていた」 (Barry 15)。

二大古典大学の他方ケンブリッジは、オックスフォードよりもさらに後発であった。自らもその草創期の只中にいたティルヤード (E. M. W. Tillyard) の記述を参照してみたい。ティルヤードの説明によるケンブリッジ英文学の特徴は、1917年に創設された英文学トライボス (Tripos) の斬新さである。トライボスとはケンブリッジにおいて卒業認定試験ととらえられている制度であるが、古典やアングロ=サクソン学に伝統的であった文法・文献学的色彩の濃い教育からの解放、近代文学への注目、作品の鑑賞・批評への傾斜、といった特徴を有していたケンブリッジの英文学は当時としては画期的であった。

1917年以前の文学研究の特徴についてティルヤードは、「当時の古典トライボスにおける『文学』は、テキスト=原典批評 (textual criticism) こそが最も高貴な学問であり、テキスト=原典研究が落ち着いた後に導

かれるとされた文学的評価の行為にはるかに勝るものであるとする迷信による影に覆われていた」(14)と明言するように、文学研究といっても、その中心は評価を伴う批評ではなく、古典的な原典研究であったようだ。こうした従来からの授業内容の改革に関しては、英文学を文献学から救い出すことの必要性を説いたチャートン・コリンズ (J. Churton Collins) の *Study of English Literature* などの著作も、1917年への布石のひとつとなったと述べている (Tillyard 31)。こうして伝統に抗するかのようになり、1917年トライポスのシラバスにおける大きな改革——中世英語の縮小、文学研究と歴史・社会的文脈のつながり、など——のひとつとして、ティルヤードは文献学を必修からはずしたことを挙げている (56-59 参照)。また、『『比較』 特殊課題と文学批評についての2つの試験の存在がトライポス考案者たちの考えを示している。すなわち、文学への好みを有する学生の人文教育にとって最善のコースは、古典の学科を修めた後、一般的な設定における偉大で生き生きとした英国の作家を主たる主題とする広範囲にわたる試験を行なうことである』(60)と述べ、ケンブリッジ英文学の批評や近現代文学への関心を指摘している。さらにティルヤードは「昨日書かれた好短篇とエリザベス朝時代のペトラルカ風ソネットを学問的に区別することはなかった」(82)と、ケンブリッジを支配していた「リベラルな」風潮にも言及する。

新しいシステム下での教育を受けた Basil Willey, Mrs H. S. Bennett, G. H. W. Rylands, F. R. Leavis, L. J. Potts, T. R. Henn などの世代が教師となっていく時代が1920年代中後半からやってくる。こうした発展段階を描きながらも、他方でケンブリッジの変化にも言及するティルヤードは、「第一段階の終焉」を示すものとして、たとえば、I. A. リチャーズ (I. A. Richards) が29年の『実践批評』出版後、英国を去り合衆国、中国へと渡っていったこと、卒業生が中等教育の教師となっていった結果、大学での教育を先取りしたような形で作品を読んでくる学生がでてきたこと、さ

らにはリベラリズムの風潮が後退してきたことなどを挙げている⁷⁾。

以上、リーヴィスが本格的な言論活動を開始する1930年前後に至るまでの英文学教育の高等教育における制度化の動きについて概観してきたが、この時代は英文学教育の草創期であると同時に、若干違った見方をすれば、広義には言語文化活動と捉え得るであろう英文学教育・研究に関する言説の流動期であると捉えることも可能であろう。

2. リーヴィスの英文学部構想

(1) 古典およびアングロ＝サクソン研究からの解放、または、批評の前景化

前節で概観した英文学教育の高等教育における制度化の初期段階を背景として踏まえつつ、本節では2つの点を中心にリーヴィスの構想に目を向けていく。

その一点目は、人文学教育の中心となるべき英文学教育の課程における伝統からの解放、すなわち、ギリシア・ラテンという古典、およびアングロ＝サクソン学からの解放である。前節で少し触れてきたように、ケンブリッジの英文学部の誕生を描くなかで、ティルヤードは改革の大きな柱のひとつとして古典文献学(Philology)の必修はずしに触れていた。ギリシア・ラテンの古典、あるいはアングロ＝サクソン研究の中心である「言語学や文献学から解放された」(EU 33)英文学部で中心となるものは「批評」であるとリーヴィスは言う。

The essential discipline of an English School is the literary-critical; it is a true discipline, only in an English School if anywhere will it be fostered, and it is irreplaceable. (EU 34)

英文学教育に限らず何らかの改革について語るときに注目すべきなのは、改革者は何をもって、いかなる必要性や重要性を説きながら、従来からの慣行を覆そうとしているのか、という点であろう。われわれの主題に則して言うならば、従来まで教育の中心をなしてきた古典文献の言語的研究を否定したという事象もさることながら、より重要なのは、それに代わって提唱されるもの、すなわち「文学批評」を中心に据えるという構想に目を向けることである。今日のわれわれが文学研究という時に、批評とその他の研究手法を意識的に区別しては使わないことが多いように思うが、当時の環境では、少なくともリーヴィスにとっては両者は明確に異なるものであった。リーヴィスは従来から大学で教授されていたものを「アカデミックな (academic)」「学問知識 (scholarship)」と総称する場合が多いが、『スクルーティニー』の活動を振り返りながら「われわれは『人文学教育』において学究的大学人 (the academic mind) が嫌悪するものを推進することに関心を持っていた」(*Valuation in Criticism and Other Essays* 223, 以下 *Valuation* と略記) と述べて、学問知識教育に真っ向から反対する立場を公言する。ではなぜ批評が重要だと考えたのか。リーヴィスは続けて言う。

It trains, in a way no other discipline can, intelligence and sensibility together, cultivating a sensitiveness and precision of response and a delicate integrity of intelligence — intelligence that integrates as well as analyses and must have pertinacity and staying power as well as delicacy. (*EU* 34)

リーヴィスにとって、言語学、文献学、文学史などの scholarship は「文学についての単なる知識の習得に終わる学習」(*EU* 68) でしかない。「もし文学が学ぶ価値を有しているとするなら、その試金石となるのは知的

に文学を読む能力ということになるだろう」(EU 68)と述べて、文学テキストの実際の読みを通じた批評による知性や感受性の涵養の重要性を説くのである。

(2) 17世紀研究 —— 知の統合 ——

新しい英文学教育において、批評の重要性と等しく、複数の機会を利用してリーヴィスが提唱しているのが17世紀の総合的な研究である。『教育と大学』の中の「英文学部のスケッチ」という章において、ケンブリッジのトライポスの具体的なカリキュラムに触れながら次のように提案している。

Let us instead [...] prescribe for all students a study of the Seventeenth Century —— the Seventeenth Century, not merely in literature, but as a whole; the Seventeenth Century as a key phase, or passage, in the history of civilization [...] (EU 48)

この提案が重要なのは、文学テキストの読みや知識だけにとどまるのではなく、「文学の鍛錬を他のディシプリンや学習に関連させる」(EU 48)のような「全体的な」学習が必要だと考えられている点だ。トライポスのパートIIとして提案しているように、こうした学習が英文学部学生の上級教育に不可欠だと主張している。当時の大学教育における専門分化傾向の行き過ぎに警鐘を鳴らし、また同時にアメリカの事例を念頭に置きつつ、

An urgently necessary work, consequently, is to explore the means of bringing the various essential kinds of specialist knowledge and training into effective relation with informed general intelligence, humane culture, social conscience and political will. (EU 24)

と述べていたリーヴィスにとって、専門分化した知の統合という側面もさることながら、17世紀研究が近代文明の研究となるという実質的・現実的な有効性が重要であったという点も押さえなければならない。17世紀を「文明史における鍵となる推移時期 (key passage)」(EU 48) とみなすリーヴィスはこの時期を文明史における過渡期ととらえている。17世紀という時代は、リーヴィスによれば、「一方でダンテの世界と直接、実質的につながっており、また一方では中世的秩序と取り返しのつかないほどに決別してしまった世界を示」(EU 48) しているのである。資本主義が台頭し、「伝統からの諸抵抗を凌駕して」しまい、「経済の領域ではこのエートスが原則、道徳、支配的精神として受け入れられた」(EU 48) のもこの時期である。政治の領域では「議会の支配が始まり」、「有機体としての社会という概念は株式会社としての社会という概念にとって代わられる」(EU 49)。したがって、このような時代について「総合的に学ぶこと (integrating study)」は、「必然的に包括性、複雑性ならびに統一性をもって」くるであろうし、「それは、経済、政治、道徳、精神性、宗教、芸術、文学の関連を具体的な用語で学習することになるであろう」(EU 49) と述べるのである⁸⁾。

このような提案ないし英文学部構想にはリーヴィスの文明・文化観を探ることができるだろう。17世紀の包括的な学習は歴史的学習というだけでなく現代文明研究のためでもあった。

The aim is to produce a mind that will approach the problem of modern civilization with an understanding of their origin, a maturity of outlook, and, not a nostalgic addiction to the past, but a sense of human possibilities, difficult of achievement, that traditional cultures bear witness to and that it would be disastrous, in a breach of continuity, to lose sight of for good. (EU 56)

17世紀研究の提唱（＝英文学部構想）は近代文明の諸問題に取り組むことのできるような知性を持った学生の育成を念頭に置いたものである。現代の起源としての過去を理解し、人間の可能性を信じる知性を育成するということが構想されているのがわかる。

このように見てくると、冒頭で見たリーヴィスの大学論——リベラル（教養）教育の重視、そしてその教養教育の中心に英文学教育を据えようとする構想——の根拠が理解されてくるだろう。文学テキスト研究・批評のみに専門化して閉じるのではなく、現代文明を取り巻く問題に広く対応できる知性の教育の場として英文学教育が構想されているのだ。リーヴィスは次のようにも言っている。

Perhaps enough now has been said in this inevitably sketchy way to make plain the lines on which the problem would be tackled —— the problem of working out, in relation to modern conditions, a liberal education that, while aiming to promote something better than the calculating minimal acquisition of subsidiary odds and ends, shall avoid promoting industrious dissipation or the mere acquisition of unrelated patches of knowledge. The integrating principle is to be found in the defined scope of the field of study. English civilization in the Seventeenth Century; [...] (EU 58)

教養教育、ひいては大学教育の中心に英文学を位置づけようとしていたリーヴィスの構想は、前節で取り上げた批評の機能論に加えて、このように現代文明を包括的に学ぶことをもうひとつの大きな柱として置くことで総合的知のディシプリンとしてさらに補強されてくる。つまり、知識の習得に終始するのではなく、文学テキストの読解に基づく批評活動が中心に据えられる。ここで期待されているのは感受性や知性の涵養

であることについては前節で見てきた。そこからさらに一歩進めるように、「他に取って代わることのできないディシプリンにおいて提唱しているような学習がなされれば、学生の側には、極めて他に依存しないかつ信頼に足りる知性と判断力の訓練が伴うので」(EU 35) あり、こうした能力は人生に必要なものだと次のようにリーヴィスは主張する。

The more advanced the work the more unmistakable is the *judgment*. That is concerned inseparable from that profoundest sense of relative value which determines, or should determine, the important choices of actual life. (EU 35)

すなわち、批評活動行為による知性と感受性の涵養はより確固たる判断力の育成となる。さらには相対的価値感覚を磨き、このことは人生の様々な局面における正しい選択を可能にするというわけである。また、批評は具体的なものに特に関心を寄せるという点から、「伝統の本質や重要性への、比較できないほど内省的で繊細な手ほどきを提供することができる」(EU 35) とも述べている。

このように、的確な選択・判断を可能ならしめるような感受性・知性を涵養することができ、かつ問題山積の現代文明社会・文化を検証する学問領域こそ、「人間の意識の生きた中心」たるべき大学において中心的に取り扱われるべきものであり、その場所こそまさに英文学部に他ならないとリーヴィスは主張したのである。

3. リーヴィスの現代社会・文化観と有機的共同体

前節で見たように、過去の歴史的研究を通して 20 世紀社会の課題に迫ろうとしたリーヴィスの英文学部構想を踏まえて、ここでは現代社会 [20

世紀中盤」という歴史的時空において大学教育を構想するリーヴィスの社会・文化観の一端を見ておきたい。

初期の論文を『連続を求めて』(*For Continuity*, 以下 *FC* と略記) というタイトルのもとにまとめていることからもうかがえるように、リーヴィスの現代社会・文化の捉え方の特徴のひとつは、「(「連続」の裏返しという意味における)「断絶」という考え方である。「まず第一に機械が、他に類を見ないほどの割合で、習慣や生活環境に変化をもたらした」(*FC* 16) と述べて「機械」文明の影響に言及した後に、「脅威なのは連続における裂け目 (a breach in continuity) であり、不注意に捨てられたものは取り返しのつかないものかもしれないし、あるいは忘れ去られるかもしれない」(*FC* 17) と述べて、リーヴィスは現代と過去との間に大きな「裂け目／断絶」を見てとる。「伝統的な生のあり方は機械によって破壊されたのであり、人間の生活はますます自然のリズムから離れていく」(*FC* 139)。リーヴィスは近代社会と過去との違い、言い換えれば、失われた過去という考え方を強調するのである。

また20世紀の社会・文化にリーヴィスが見出すのは、機械化とともに「大衆化」である。機械文明の発達と共に近代社会では映画や広告、大衆紙ジャーナリズムなどの大衆文化が発展した。リーヴィスにとってこのような動きは「悪貨が良貨を駆逐する」ような「均質化 (standardizing)」の動き、あるいは「質低下 (levelling-down)」に他ならなかった。こうした質低下の影響を受けるのは言語も同様である。

[...] the constant use [...] of the emotional vocabulary for effects of vague 'uplift' and warm sensational expansion is debasing national life by so debasing some most important words that it has become almost impossible, either for the ordinary person or the artist, to use them seriously. (*Culture and Environment* 53, 以下 *CE*

と略記)

近代文明社会に特徴的な広告やシネマ、ベストセラーの言語は、「平均的大衆 (average member of the public)」(CE 12) に訴えることを主目的とするものであるから、そこで使用される言語も均質化し、結果的に質低下を招くとリーヴィスは考える。“Largely conveyed in language, there is our spiritual, moral and emotional tradition, which preserves the ‘picked experience of ages’ regarding the finer issues of life” (CE 81) と述べ、時々の時代精神のようなものを反映し、人間の生の繊細で素晴らしい伝統は言語 (= 文学) によって維持されてきたと考えるリーヴィスにとって、現代の状況は文化への大いなる脅威と映ったに違いない。さらに、こうした大衆文化が席卷する時代は「基準となるべきものがなく、そして見識ある (discriminating) 大衆も存在しない時代」(FC 30) である。

このような近代社会から「断絶」し、その結果失われてしまったものとは何か。ひと言で言うなら、リーヴィスはそれを過去の「有機的共同体 (organic community)」という概念で表す。「われわれが失ったものは、それが体現する生きた文化を持っていた有機的共同体である」(CE 1)。それは「発展」の名の下に起こった「変化」によって今や消滅してしまった「古いイングランド」(CE 87) の姿である。リーヴィスは多くのところで同じようにこの過去の有機的共同体の喪失に触れ、そのいくつかの特徴を示唆しているようである。リーヴィスの同時代人で、同じく古いイングランド社会 (village) の変化・消滅を描いたボーン (G. Bourne) に言及しながら、「真に有機的だったのは人間同士の関係、および人と周りの環境との関係であった」(CE 85) とも述べている。「有機的共同体の消滅と共に、真の国民文化のための基礎も」(FC 108) 失われた。先に引用したように、伝統的な生のあり方が機械によって破壊され、自然のり

ズムからも離れてしまった結果、「文化は混交し、いろいろな形式 (forms) は分解し混乱状態となった」(FC 139) という記述からは、過去の有機的共同体には混乱はなかったとリーヴィスは考えていることが類推できよう。「なくなってしまったのは秩序なのである。[……] それに代わってあるのは、文化の崩壊、機械的組織、そして絶えざる急速な変化なのである」(FC 217)。要するに、現代の文明社会にはないものとして憧憬する過去の有機的共同体は、人と人、人と自然のかかわりを保持し、必ずしも平等ではない階層性を伴った秩序、生き生きとした均質な文化、などの特徴を有したものとして想像することができるだろう。言語文化＝文学に限るならば、「生きた伝統の中に維持されていた基準」(FC 49) が存在していたということになろう。この水準、伝統を現代においてあらためて見直し、維持することを目指したのが、リーヴィスの文学批評における伝統論であったことは言うまでもない。

4. 理想としての有機的共同体を問う

リーヴィスが再三にわたって言及する有機的共同体とは、パストラルを彷彿させるような平和な田園社会で、一定の均質な文化水準と共に誰もが満ち足りて暮らしているようなユートピア的で非現実的な時空との印象を与えるだろう。しかしながら実際に現実的な農村社会の復活を彼が本気で訴えているとは想像しがたい。受け取る側の印象も同様で、『ジョンズ・ホプキンス版文学理論・批評ガイド』によればリーヴィスの有機的共同体は「疑いなく神話的次元を有する」ものであり、イーグルトン (Terry Eagleton) も、それは「近代産業資本主義の機械化された生の批判に都合のいい神話」(36) であると指摘し、マルハーン (F. Mulhern) も『『有機的共同体』は本質的には、都市産業主義的秩序が放棄した社会的価値の、推測上の歴史的具體化であった』(59) と述べているように、

それは実際の過去を問題とするというよりも、「近代社会の現状や未来像に関する言説における批評の装置」(Mulhern 59)としての機能を目論んだリーヴィスの言論戦略の一環であったという見方があっても不思議ではない。むしろそのような見解の方が一般的であろう。われわれは、20世紀の近代社会に危機的状況を見出し、近代社会からは失われたものとして有機的共同体をとらえているリーヴィスを見てきた。社会批判として、いわば近代社会の裏返し、もしくは代替物としての有機的社会という理解において、イーグルトンやマルハーンらの指摘は正しいであろう。しかしながら、もう一步踏み込んでその中身を再考・比較検討するならば、単なる失われた過去へのノスタルジーや、議論上の戦略としての神話という指摘には収まりきれないものを見出すことも可能ではなからうか。

すでに見たように、リーヴィスは20世紀の社会を文化的に混乱した状況にあると評していた。こうした状況を別のところでは「異種混交 (heterogeneity)」の問題として指摘している (*How to Teach Reading* 3, 以下 *How to* と略記)。異種混交であるが故に現代は「嗜好／鑑賞力の獲得 (acquiring of taste)」が困難な時代だと述べている。ここでリーヴィスの言う「異種」とは何の異なりであろうか。リーヴィスは続けて「18世紀」と比較してみようと言い、次のように書いている。

Not only were there far fewer books to read, fewer topics and fewer distractions; the century enjoyed the advantages of a homogeneous — a real — culture. So Johnson could defer to the ultimate authority of the Common Reader. For the Common Reader represented, not the great heart of the people, but the competent, the cultivated, in general; and these represented the cultural tradition and the standards of taste it informed. (*How to* 3)

リーヴィスがここで異なっているとして注目しているのは、読むべき本やトピックの多少ではなく、読者層の問題である。18世紀、ジョンソンの時代を参照しつつ、そこにおける教養人読者層の存在を指摘しているのだ。この環境の下で文化は「均質」に保たれ、そこで文化の伝統や鑑賞力／嗜好 (taste) の水準が醸成されていく。リーヴィスは続けて書いている。

And the competent, with their more-than-individual judgment, their better-than-individual taste, *were* common, for to be born into a homogeneous culture is to move among signals of limited variety, illustrating one predominant pervasive ethos, grammar and idiom [...] and to acquire discrimination as one moves. (*How to 3*)

均質な文化のなかに生れ落ちればおのずとそこで様々なものを吸収することになる。したがって、この個人的なものを超越する判断力や嗜好を有する有能な読者層という存在は別段特別なものではなかった、と言っている。リーヴィスは、一定の有能な読者層の存在によって文化水準が保証され、文化的に均質な社会共同体を思い描いているのである。

ケンブリッジにおけるリーヴィスの教え子で、後に妻となり、『スクルーティニー』の中心の一人として活躍した Q. D. リーヴィスも、その著書で読者大衆の問題を扱い、18世紀から19世紀前半にかけての *The Spectator* や *The Edinburgh Review* などの定期刊行物を論じるなかで、読者層 (reading public) の均質性を指摘していることも周知の事実かもしれない (172 参照)。

繰り返しになるかもしれないが思い起こしたいのは、こうした過去の時代とは違い、「周りの混乱に晒されている」 (*How to 4*) のが現代の状

況であり、そこには「コモン・リーダーはなく、伝統は死んでいるのである」(*How to 4*)。したがって、この状況から文学文化を救うには、ジョンソンの時代のように時代の文化にどっぷりと浸っていればおのずと身につく、などというだけでは決して十分ではない。「意識的努力」(*How to 4*)が必要となる。「意識的努力」とはリーヴィスにとって、つまり「注意深く構想された教育」(*How to 4*)というわけだ。

もはやある程度明らかになっていると思われるが、現代では失われている均質な文化を有し、コモン・リーダーの存在する安定した社会と、今では崩壊したものとされる有機的共同体とを、少なくとも部分的な特徴において結びつけることは必ずしも強引ではないであろう。この点に関して本稿に近いスタンスを取っているように思われるアンダーソン(Perry Anderson)を参照してみよう。アンダーソンは、リーヴィスの批評における特異な認識論の存在を指摘する。それは、リーヴィスが自らの主張の理論的根拠を求められる時に用いる、明確に根拠を提示することなく、読者に同意を求めるような疑問形「これはこういうことですよ。(This is so, isn't it?)」に見られる認識論である。すなわち、読者に同意、つまり同じ解釈を求めていくことが、リーヴィス自身が認める彼の方法論となるというのである。そして、この認識論の前提条件として、価値の認識を共有できるような道徳的・文化的に同質な読者の存在 (a morally and culturally unified audience) が不可欠となり、ゆえにリーヴィスの著作の至るところにおいて「有機的共同体」が希求されるのだ、と述べている。

要するに、有機的社会とは、過去へのノスタルジーが生み出すユートピア、あるいは言論活動における単なる戦略上の神話装置というばかりではなく、形象を多少変えてではあれ、やはりリーヴィスがどこかで現実的にその復権を望み、模索しているものだと解釈してみることも可能ではないだろうか。そして、その「どこか」も、すでに明らかかもしれない。

5. 英文学部再訪

ここで再び英文学部での実践に目を向けてみよう。リーヴィスが大学英文学部という教育の場をどのようにとらえているのか、という問題に帰ってみたい。大学という特殊な場所に鑑みれば当然という側面もあるのだが、リーヴィスは「率直に認めるが、私に関心を持っているのはエリート教育である」(Valuation 169)と公言する。このような発言は、マイノリティ文化論と合わせて彼が批判される所以でもあろう。少し本論の筋からは逸れるかもしれないが、この点に関連してリーヴィスは同じ論文の中で次のようにも述べている。

[...] in England too we have now, and shall have more and more, to fight against that interpretation of democracy which amounts to the law that no one may have anything everyone cannot have. (Valuation 169)

すなわち、「万人が同じものを得る」という類のデモクラシーに対しては公然と抗することをリーヴィスは表明しているのだ⁹⁾。

リーヴィスには当初から、文化を理解し維持するのは一握りの少数派であるという考えがあった。「いつの時代においても、芸術や文学の洞察力ある理解や鑑賞が依拠するのは、非常にわずかなマイノリティである」(FC 13)。「ダンテやシェイクスピア [……] を理解するだけでなく、彼らの最新の継承者を認識できる能力を持つマイノリティが、特定の時代における民族(あるいはその一部)の意識を形成するのである」(FC 15)。したがって当然ながら、繊細な伝統を守り維持していくのも彼らマイノリティということになる。それにより文化水準も維持される。言うならば、規模は違うかもしれないが、リーヴィスの言うマイノリティとは、

現代版コモン・リーダーであり、その育成の夢を『スクルーティニー』の読者層はもとより、大学の英文学部にも求めたのである。

今一度彼の「批評」に戻ってみよう。リーヴィスは「批評」を具体的にどのようにイメージしているのか。「実践批評」の現場では、学生であれ批評家であれ、基本的に前例や特定の枠組みなどに制約されることなく、批評者個人の反応や判断を表明し合う。

The peculiar importance of literary criticism has by now been suggested; where there is a steady and responsible practice of criticism a 'centre of real consensus' will, even under present conditions, soon make itself felt. Out of agreement and disagreement with particular judgments of value a sense of relative value in the concrete will define itself." (FC 183)

ここでリーヴィスが説いているのは、賛否両論の判断を表明し合う批評行為という共同作業からコンセンサスや価値が創造されるということである。批評行為の目指すところが、批評者単独の個人的行為ではないということへの注目が重要である。アンダーソンが指摘していたような、同意を求めていくリーヴィス独自の認識論の要点もここにある¹⁰⁾。この部分を受けてバイラン (R. P. Bilan) は以下のようにコメントしている。

This relative sense of value which comprises the contemporary sensibility can be defined only by a collaborative process. Leavis always regarded collaboration — the interplay of personal judgments in which values are established in the concrete and a world created that is neither public nor merely private — as an essentially creative process; the function of criticism, therefore, must be

seen to be a creative achievement. (64) (emphasis added)

あくまで個々人の能力に依拠しつつも、批評という共同作業を通して価値の形成が行なわれる。そして「[[批評]」がその機能を果たす時、それは単に『時代の感受性』を表明し定義するのみならず、その形成に寄与するのである」(FC 183)。さらには、こうした批評活動のプロセスはまさに「人間世界が形成され、蘇生もし、生き生きと保たれる」(Valuation 223) プロセスなのである。批評活動が時代の文化水準や社会を形成していくとされている。

まさに時代の価値や感受性を形成すること、これは、表現は多少異なるかもしれないが、18世紀の英国社会にリーヴィスが見出していたコモン・リーダーの機能=役割に他ならない。リーヴィスの構想する英文学部とは、一方で、過去に学びつつ近代文明社会の諸問題を見据えながら、また一方では、第一義的には個々人によるテキスト精読に基礎を置きつつ、批評の実践を通して知性・判断力を育成し、同時に批評という共同作業を通して価値を創造し、文化伝統を維持していくことの可能なエリートたち、現代版コモン・リーダーとなりうる可能性を秘めた学生集団の育成の場となるものであった。そこにわれわれは、今では喪失してしまったものとして彼が憧憬していた有機的共同体社会が、新たな姿で復権するというリーヴィスの夢とでも呼べるものを垣間見ることができるのではなかろうか。

おわりに

本稿は、前世紀前半から中盤にかけて、英国の大学におけるリベラル・教養教育の中核に英文学教育を組み入れようとしたリーヴィスの英文学部構想に着目してきたものである。まず、その背景として考えられる英

文学教育の大学における制度化の動きを概観した。そしてそうした草創期の余韻の残るなかで、リーヴィスの、主としてケンブリッジを念頭に置いた英文学部構想を見てきた。知識習得の鍛錬を主とする古典、アングロ＝サクソン研究の文献学・言語学ディシプリンからの解放を強く訴えたリーヴィスは、代わりとなる中心的なディシプリンとして「批評」を打ち出した。さらに、アドヴァンスト・プログラムとして17世紀の総合的研究を提唱していた。こうした教育を通して学生のどのような能力の育成を目指したのかという点に注目し、その点とリーヴィスの言論活動全般から、彼の社会観や文明・文化観との接点を見出すことができた。リーヴィスの近代社会・文化観には彼の強い危機意識が明確に表れていた。リーヴィスの英文学部構想は、こうした彼の危機意識と強く結びついたものであったと行うことができよう。単純化を恐れずに言うならば、現代版コモン・リーダーを育成でき、有機的共同体の概念にも通じるものとしての英文学部に、リーヴィスは、現代における一定の文化水準の維持および創造を託したと言えるのである。

本稿でも言及した彼のマイノリティ文化観やデモクラシー論などは、時には厳しい批判に晒されてきたことも事実である。本稿ではそうした批判やリーヴィスの考えそのものにコメントすることは、紙幅に限りもあり控えることとなったが、このことによって本稿がリーヴィスの立場・発言を是認しているということではない。本稿はそうしたリーヴィスの立場なり概念の客観的な記述・説明に終始したつもりである。

本稿で見てきたリーヴィスの活動がどのような影響を持ちえたかということについては稿を改めて取り組むべき課題であると考えている。「はじめに」において課題設定をしたように、現代文学批評の黎明期において展開されたものとしてリーヴィスの言論活動を理解していくことが肝要であろう。こうした言論活動を通して大胆なキャンオン論が打ち出され、リーヴィスにとっての規範的作家像が提示されていく。そしてこれらに

少なからぬ影響を受けながら、広く研究・教育・文学・批評といった社会文化言説が産出されていくのである。本稿は、言うまでもなく、こうした課題を進める上ではその前提作業を行なったに過ぎないが、それは文学研究の社会文化的な構築過程を考察していくには必要な作業であり、リーヴィスに着目することはそうした作業の有効な方法のひとつであろう。加えて、大学人リーヴィスという属性も合わせて考えるならば、1930年代から晩年の70年代にかけて、英国のみならず世界の大学を取り巻く環境が一度ならず大きく激変するなかで、大学教育、英文学教育の役割や意義・重要性を、時には独善的との非難を受けながらも、かくも堂々と果敢に主張し続けた F. R. リーヴィスという批評家・教育者は、単にリベラル・ヒューマニストとしてのレッテルを貼って通りすぎるのではなく、もう一度立ち止まって、現代の新たな視座から目を向けてみるに値する対象なのではないだろうか。

注

- 1) M. Bell の *F. R. Leavis* (1988) や G. Day の *Re-Reading Leavis* (1996) など少数ではあるが、比較的近年でもリーヴィスの読み直しを試みる仕事があることも記しておきたい。
- 2) 英文学を教養教育、そして大学教育の中心に据えるという考えに至る背景としては、英国における教養教育重視の伝統が存在したことを押さえておく必要があるだろう。教養教育が担っていたものと英文学教育がリンクしてくる歴史的過程に注目する必要がある。(石原、『『ロレンスとリーヴィス』再考』参照)
- 3) 開設から6年後、1893年当時の学生数は、哲学30人、漢学9人、国史科22人、史学27人、博言学4人、英文学7人、独文学2人、仏蘭西文学0人、という状況であった。(参照：『日本近代教育百年史4』486)
- 4) 例えば Widdowson, Baldick などを参照。
- 5) Eagleton (27) や Baldick (61-67) などを参照。Baldick はまた、東インド会社における公務員採用試験に英語・英文学が採用されたことなどによる大英帝国という文脈から生じる英文学のニーズ、および女子教育の分野に果たした

英文学の役割にも触れている。

- 6) この文脈で指摘しておかねばならないのは、この時期における国家委員会によるいくつかの教育レポートの存在である。なかでも英文学教育との関連で言及されることの多いのが「ニューボルト・レポート」と呼ばれる 1921 年の報告(正式名称: *The Teaching of English in England: Being the Report of the Departmental Committee Appointed by the President of the Board of Education to Inquire into the Position of English in the Educational System of England.*) である。

Baldick や Widdowson をはじめとして英文学教育の歴史を論じている論者の多くが一定の紙幅を割いて言及しているこの報告書は、「国民教育」の大きな担い手として、母語としての英語・英文学教育の重要性を説いていることが特徴となっている。さらには、台頭する労働者階級への危機意識も底流に流れており、階級特権的な古典教育ではなく、すべての階級が接近・入手可能な英語・英文学は、「階級をつなぐ絆 (a bond of union between classes)」として機能すると訴えている。

また、時代的な背景もあつてか、ドイツの影響からの解放を訴えつつ、文献学や言語学などから一定切り離れた文学教育の必要性を説いている部分などは、われわれの以下の論考とのかかわりでも興味深い。(Report, 217-221 参照) さらには、Widdowson が指摘しているように、レポートが「安定して均質で、有機的な」英国社会として、17 世紀の「エリザベス朝文化」を志向しているという点は、リーヴィスの社会・歴史観の形成という側面からも注目していきたい部分である。(Widdowson, 47 参照)

- 7) 最後の点——リベラリズムの後退——に関して、本稿にとって興味深いのは、その傾向のひとつとしてティルヤードが『スクルーティニー』の影響を指摘していることである。名指しこそしていないが、その批判の矛先は雑誌の主宰者であるリーヴィスに向けられているといっても間違いではないだろう。曰く、「『スクルーティニー』は 1932 年に創刊され、その創始者や幹事たちは意識的に意図してはいなかったかもしれないが、それは妥協を許さない意見を伝えるその権威主義的トーンを通して、批評の本質についていかに考えるべきか、あるいは評価するにふさわしい、または逆に軽視すべき作家について教えられることを求めていた、次第に数を増していた学部学生の少数派を満足させるのに一役買っていたのである」(128)。すなわち、自由に自らが選ぶのではなく、権威

主義的な物言いによって与えられるものを受容する学生層が増大していたことを指摘して、リベラリズムの後退と呼んでいるのである。

ティルヤードの批判の矛先が向けられていることも無縁ではないかもしれないが、ケンブリッジにおけるリーヴィスの立場は決して主流と呼べるものではなかった。大学教師としても長年にわたって不安定な身分を余儀なくされていた。リーヴィスの伝記を執筆している MacKillop や Samson は一様にこの点を指摘している。批評スタイルの革新性、ストレートな批判、モダンの作家にも果敢に対象領域を広げていく姿勢など、その要因は様々であったようだが、とりわけティルヤードとの確執は顕著であったことを MacKillop は伝えている。(MacKillop, 120-180, Samson, 21-26 を参照)

- 8) しかしながら、ベルによれば、この17世紀研究構想は、その後の大学カリキュラム改編の過程で実現されることはなかった。アングロ＝サクソン研究の必修はずしや実践批評の活用など、リーヴィスが提唱したものの多くが、特に60年代に新設された大学において採用されたが、17世紀研究はそうならなかった。(Bell, 8-9 参照)
- 9) 有機的共同体社会という考え方は、英国の思想界においては歴史的な系譜を有して存在しているが、近代以降において台頭してくる「デモクラシー」の潮流に対抗するものとして多くの思想家たちが「有機的なもの」を対置してきたということを確認することができる。(石原、「『ロレンスとリーヴィス』再考」参照)
- 10) ここで指摘できるのは、共同作業とは言え、Anderson の指摘を想起すればわかるように、リーヴィスの特徴はあくまでも同意を求めたということである。そしてもちろん、共通認識へといたる基準は常にリーヴィスの側にあった。ここから彼の解釈や判断が独断的・ドグマ的と批判されることもある。

参考文献

- Anderson, Perry. "Components of the National Culture" *New Left Review*. 50 (1968). 特に 15 "Literary Criticism" の項 pp.50-56.
- Baldick, Chris. *The Social Mission of English Criticism*. Oxford: Clarendon Press, 1987.
- Barry, Peter. *Beginning Theory*. Manchester: Manchester UP, 1995.
- Bell, Michael. *F. R. Leavis*. London: Routledge, 1988.
- Bilan, R. P. *The Literary Criticism of F. R. Leavis*. Cambridge: CUP, 1979.

- Day, Gary. *Re-Reading Leavis*. London: Macmillan, 1996.
- Eagleton, Terry. *Literary Theory*. Oxford: Basil Blackwell, 1983.
- Groden, Michael and Martin Kreiswirth (Ed). *The Johns Hopkins Guide to Literary Theory and Criticism*. Baltimore & London: The Johns Hopkins University Press, 1994.
- Leavis, F. R. *D. H. Lawrence: Novelist*. 1955; Harmondsworth: Peregrine Books, 1964.
- . *Education and the University*. 1943; Cambridge: CUP, 1979.
- . *For Continuity*. 1933; Freeport, New York: Books for Libraries Press, 1968.
- . *The Great Tradition*. 1948; Harmondsworth: Peregrine Books, 1962.
- . *How to Teach Reading*. Cambridge: The Minority Press, 1932.
- . *Valuation in Criticism and Other Essays*. Ed. G. Singh. Cambridge: CUP, 1986.
- Leavis, F. R. and Denys Thompson. *Culture and Environment*. London: Chatto and Windus, 1933.
- Leavis, Q. D. *Fiction and the Reading Public*. 1932; Norwood Editions, 1977.
- MacKillop, Ian. *F. R. Leavis: A Life in Criticism*. London: Allen Lane, 1995.
- Mulhern, F. *The Moment of 'Scrutiny'*. London: NLB, 1979.
- Palmer, D. J. *The Rise of English Studies*. London: OUP, 1965.
- The Teaching of English in England: Being the Report of the Departmental Committee Appointed by the President of the Board of Education to Inquire into the Position of English in the Educational System of England*. London: Published by His Majesty's Stationary Office, 1921. (*Report* と略記)
- Samson, Anne. *F. R. Leavis*. London: Harvester Wheatsheaf, 1992.
- Tillyard, E. M. W. *The Muse Unchained*. London: Bowes & Bowes, 1958.
- Widdowson, Peter. *Literature*. London: Routledge, 1999.
- 石原浩澄 「『ロレンス研究』の研究」『D. H. ロレンス研究』日本ロレンス協会, 2007年。
- 「『ロレンスとリーヴィス』再考」『ロレンスへの旅』. 松柏社, 2012年。
- 『日本近代教育百年史』国立教育研究所, 1974年。

